

## 学部留学生の自律的学習能力向上支援を目指す日本語教育方法の探索：メタ認知の活性化を促す学習活動を通して

長谷川, 順子

<https://doi.org/10.15017/2534368>

---

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：

氏 名 : 長谷川 順子

論 文 名 : 学部留学生の自律的学習能力向上支援を目指す日本語教育方法の探索  
—メタ認知の活性化を促す学習活動を通して—

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、日本の大学で学ぶ学部留学生の自律的学習能力の向上を支援する日本語教育方法を開発することを目的とする。留学生対象の日本語科目の授業に自律的学習能力の向上に有効とされているメタ認知の活性化を促す活動を組み入れ、継続的にその活動の内容と方法を改善しつつ結果を観察し、受講した学習者の認識と行動を質的に調査して、方法の妥当性を検証した。以下に、本論文を構成する各章の概要を示す。

第1章では、本研究が必要とされる背景と目的を述べ、探索方法を示した。今日の大学教育で育成することが目指されている「学士力」及び関連する能力の内実を確認した上で、学部留学生への重要な支援として提供される日本語教育科目の役割を検討し、自律的学習能力の養成が喫緊の課題であることを捉えた。この認識に基づいて、自律的学習能力の向上を支援する学習方法を探索するという本研究の目的と意義を述べ、その探索を進める手順を提示した。

第2章では、学部留学生の自律的学習能力の向上を支援する活動を考案する前提として、関連する主要な研究を概観して課題を認識するとともに、留学生の持つニーズと可能性を把握した。まず、「自律的学習能力」という概念を検討し、その中核要素とされる「メタ認知」を活性化させるには「ストラテジー」の知識・技能の向上と自己の学習を捉える「内省」の促進が必須要素であることを認識した。また、学部留学生に提供される「アカデミック・ジャパニーズ教育（以下、AJ教育）」が目指す「市民としての力」は、「学士力」の中心概念である「生きる力」に通底し、「自律的に学ぶ力」が必須要素であることを確認した。こうした認識に基づく実践研究が既に行われ、教育方法開発への示唆が豊かに提供されているが、ストラテジー指導と初年次段階のメタ認知の発達を継続的に観察して効果を検証することは、いまだ試みられていなかった。一方、学部留学生に行った実態調査結果から、自律的学習技能を伸ばす必要があることが明らかになった。以上の検討から、本研究では、「メタ認知」の活性化を目指し、その直接的表れの一つと見なされる「学習ストラテジーの理解と行使」とメタ認知の発達を促す「内省活動の実行」を基本方針として、それに資する学習活動を考案して実行し、学習者の認識と行動の変化を観察してその効果を検証すべきと考えられた。

第3章では、上記の基本方針に基づいて開発し、2014年度から2017年度の4期にわたって行った学習活動と用いた教材を示し、アクション・リサーチの経過を報告した。教育実践と調査を行った場合は、九州地区の某国立大学工学部の学部留学生に提供されている日本語科目「日本事情」で、読解活動や発信活動に関連した「学習ストラテジーの理解と行使」と「内省活動の定期的実行」の

2つの活動を必須項目としながら、当該学期の受講者のニーズと実施結果の分析に基づいて、各期の使用教材や活動内容を調整した。受講者の数は限られていたが、継続的な観察を行い、これまでほとんど捉えられていなかった初年次段階の日本語学習者の認識と行動の様相を明らかにした。最後に、4期にわたる実践の総合的分析に基づき、活動形態、学習素材、担当者による学習者への対応の3点から、望ましい支援の方法について考察した。

第4章では、当該科目の実施中及び終了後に得られたデータをもとに、授業に組み入れたメタ認知活性化を目指す活動の妥当性を検証した。学習者が毎回の授業の最後に記述した内省文を主要データとして実施中の学習者の認識や行動を分析し、学習活動への動機の継続と学習に関する気づきの状況を観察した結果、概ね望ましい方向への変化が起こりつつあることが捉えられた。科目終了の約2週間後と約半年後に協力者に対して行った半構造化面接調査結果の分析から、科目中に捉えられた肯定的な変化が終了後の日本語科目以外の科目や他の活動へも波及していることを確認した。加えて、学習者の内省文に行った教員のフィードバックを分析し、継続的なフィードバック活動が学習者のメタ認知を活性化させただけでなく、教員自身の内省にも肯定的な影響を及ぼした可能性を捉えた。以上の検証から、基礎的学力が高く主体的な学習能力を備えていると見られた本コースの留学生にとっても、意識的にメタ認知の活性化を促す活動が「学び方」を拡張する契機となり有益な影響を及ぼしたことが観察された。本研究が、これまで積極的な援助方法の考案が等閑視されがちであった高いレベルの基礎力と意欲を有する学習者を対象とした日本語科目のコース・デザインの開発に寄与したと考えられた。

第5章では、研究成果をまとめ、残された課題を総括した。初年次の学部留学生への支援として本研究が設定した「自律的学習能力向上の支援」という目標と、本研究で行った「メタ認知の活性化」を主眼とする支援方法は、概ね妥当であり、AJ教育が目指す「市民としての力」の育成に欠かせない自律的学習能力を高めることに役立つと考えられた。自己主導型の学習への適応が速やかに進まない学習者へのよりよい支援方法については、今後も継続的に観察と検証を積み重ねていく必要が認識された。本研究は、対象とした数が限られ、かつ、比較的基礎力の高い学習者に限定されていたが、その基礎力の高さゆえに自助努力に期待される傾向があった学習者も援助を必要としており、彼らの必要に適合した援助を提供することによって大学教育の目標の達成に直結する成果が生み出されることを明らかにした。本研究の成果は、学部留学生への日本語教育方法として広く応用され得るものであり、学部留学生教育の質の向上に一定の貢献をなしたと考える。